

子どもを取り巻く現在の社会状況

以下のようなことは、聞いたことはありませんか？あなたの身の回りでも起きていませんか？

- ・少子高齢化で、一緒に遊ぶ子どもの数が少なくなった。
- ・塾や習い事に通う子どもが増え、遊び相手がなくなった。
- ・近隣の学校が廃校となり、遠方の学校にスクール・バスで通学する児童生徒数が増えた。
- ・両親共働きが当たり前となり、親子の会話や一緒に過ごす時間が減った。
- ・核家族化で、多世代交流が少なくなったり、きょうだいも少なくなった。
- ・近所付き合いが希薄になった。
- ・子ども会などが減少し、地域でのつながりが少なくなった。
- ・小学生ですらスマートフォンを持つ時代。顔と顔を合わせたコミュニケーションが希薄になった。
- ・農業などの様々な自然体験の機会が減少した。
- ・周囲とのコミュニケーションに課題がある発達障がいと診断される、もしくは疑われる子どもが増えた。
- ・外国にルーツのある子どもが増えた。

- ・ **子どもの孤立化**
- ・ **地域の子育て力の低下**



- ・共働きが当たり前になり、家事や子育てに時間をかけられない。
- ・核家族化や、近所付き合いが希薄になったことにより、子育てで相談できる人、頼れる人が周囲にいなくなった。
- ・離婚率が増え、ひとり親世帯が増えた。
- ・家庭内暴力の認知件数が増えた。

- ・ **親の孤立化**

- ・様々な体験活動の減少により、達成感を味わう機会も減少した。
- ・SNS 社会で、常に周囲の「空気を読む」子どもが増えた。
- ・ロール・モデルとなる知り合いや先輩が存在しない。

- ・ **自己肯定感の減少**
- ・ **将来の展望が見えない**
- ・ **悩みを相談できない**

- ・非正規雇用の増加など、労働環境が悪化した。
- ・少子化により大学全入時代となった。中高卒では安定した職を得にくくなった。

- ・ **子育て世帯の困窮化**
- ・ **子どもの貧困**
- ・ **所得格差⇒子どもの学歴格差⇒経済格差(貧困の固定化)**

詳しくは、以下の報告書をご覧ください。

茨城県 保健福祉部 青少年家庭課 (2019年3月) 『平成30年度茨城県子どもの生活実態調査報告書』

そして、以下のような現象も生まれています。

- ・いじめなどによる不登校の児童生徒が増加した。将来のひきこもり予備軍に。
- ・虐待を受けた子どもの認知件数が増加した。
- ・ゲーム依存症の子どもが増加した。
- ・運動能力や基礎体力が減少した。
- ・給食が一日で唯一の食事になっている子どももいる。
- ・虫歯や視力の悪化がそのまま放置される。
- ・家族旅行や誕生日にお祝いをされる機会が少ない子どももいる。
- ・「フルーツがデザートに出た！」と、子ども食堂で驚く子どももいる。
- ・子どもが経済的に困窮している状況を隠すようになる。身なりは普通でも、実は困窮している。
- ・家庭で培われてきた当たり前の生活習慣（早寝早起き、出された宿題を終わらせる、食べたら歯を磨く、毎日お風呂に入るなど）が身につけていない子どもも増加している。
- ・生活保護や就学援助、児童扶養手当の受給世帯が増加し、国民全体の税・社会保障負担が増加する。
- ・格差社会がさらに進み、経済的格差が固定化すると、今度は階級社会につながる。

9つのコ食

- ・独りでご飯を食べる「孤食」
- ・同じものばかり食べる「固食」
- ・家族それぞれバラバラなものを食べる「個食」
- ・子どもだけで食べる「子食」
- ・必要以上に食事を制限したり、食欲がない「小食」
- ・外食ばかり食べる「戸食」
- ・パンや麺類など、小麦粉製品ばかり食べる「粉食」
- ・濃い味付けばかり食べる「濃食」
- ・朝食欲がなく、食べない「虚食」

子どもの貧困率

対象地域	割合		人数	年	調査主体	備考
日本全体	13.9%	7人に1人	約225万人	2015年	厚生労働省	
茨城県	12.2%	8人に1人	約42,700人	2015年	茨城県	サンプル調査
	8.4%	12人に1人	約29,400人	2018年	日本財団	

子どもの貧困を放置することによる経済的損失(2013年時点で15歳だった1学年のみで見た場合)

対象地域	生涯所得総額	税金総額	正規雇用数	調査主体	備考
日本全体	2.9兆円 減少	1.1兆円 減少	約9,000人分 減少	日本財団	※ 所得及び税金総額は、2015年度の都道府県別GDP比率より単純計算。 ※ 正規雇用数は、2015年度国勢調査時の都道府県別人口比率より単純計算。
茨城県	689億円 減少	261億円 減少	約210人分 減少		

相対的貧困とは

上記で言う貧困とは、発展途上国の飢餓、絶対的貧困とは異なり、「相対的貧困」と言います。経済的な理由により、「他の子にとっては当たり前なのに、自分にはチャンスがない」という機会のはく奪が多くある状態を指します。自分だけ貧困を感じるというのは、精神的に負担が大きいものです。

(注) 全ての子ども食堂が、上記の課題全てに取り組んでいるわけではありません。子どもの貧困対策を目的に掲げていない子ども食堂も多くあります。居場所づくりと孤食に取り組む子ども食堂も多く存在します。

